

迷走地図 臨時増刊号

2011・05・08 発行

マグニチュード
M

・ 九

村上 豊 (橄欖同人)

幾十度大きい地震を記憶せるわが脳けふの地鳴りわからぬ

本棚の本があふれるやうに跳びなにかのかげが一瞬うごく

激震の長きいたぶりぎちぎちと身悶えしつつ耐ゆる家かも

大揺れの二階ゆ居坐り下りきつこのまま奈落へ墜ちてたまるか

大揺れのやみたる間に摂りたれば昼餉夕餉のくべつもあらぬ

給水車待つ四時間に行政をとげだつ語にて誹る者あり

行列をし馴れし^{わか}壮き者たちは携へ並ぶ本、折畳椅子

待ちに待ち並びに並び得し水としつかり胸に抱き擁へきつ

大震ゆ妻子を守る^し自が姿思へ立場は逆かしれぬが

店開くを冀ひつつ大震のあとの吹雪の行列にゐる

雪被り^{モンスター}樹氷めき人並びこの鬼気われも中なる一人

積雪を洗面所^{かはや}の水にと集めをりわれら老夫婦かひがひしもよ

三月は枝垂桜のカレンダー大震のあとのころよりゆく

天譴といふな^{なみ}大地震大津波草奔われらになんの罪ある

明日へ

三月十一日午後三時前、既成語では表現できない恐怖に陥られる。

魔震、暴震、狂震とでもいうか。

マグニチュード九、震度七（因みにわが町は震度六）阪神大震の百八十倍のエネルギーというヤツ。海浜地帯は大津波、それも四階建てビルをスッポリ覆う高さで、幅十軒という今まで来たことのないのが襲いかかる。

宮城県沖で二つ、福島県沖と茨城県沖で一つずつの地震が同時発生した「想定外」。その後は震度三から五くらいの余震が日に幾回となくきて、これが連日なのだ。

今までは地鳴りを体感したのに、十一日はわからないのはトシで鈍くなったと思ったが、知人は丁度テレビを観ていて、アナウンサーが「只今大きい地震が」といって画面が消えたという。地鳴りが聞こえなかったわけだ。

揺れの感じ方は家人それぞれ違い「胸座をとって揺さ振られた」「家がぐるぐる振り回された」私は駄々っ子が大袈裟な身振りでイヤイヤをするようなと思ったが、何せ四つの地震が同時発生したのだから、違うのは当たり前か。ゆれた時間の長いことは一致したが、滅多にないことに遭遇した。

それからはテレビや新聞のとうりで、誌友諸賢の電話や手紙のお励ましに支えられて、勇気万倍で「今日」を生きている。併しライフラインの断停には処置なし。学校や公民館は避難所となり炊き出しはその人たちを優先するから余ればとのこと。そうなれば妻の生家きとに。

ガソリンが無くて車を動かせない。（これは何処のガソリンスタンドでも長蛇の車列を見た）では店に並ぶほか行動みちはない。

午前中は食料買出しの行列。午後は給水車待ちの行列。とうとう地面に坐りこんだ老婦人があり、見兼ねた壮丁漢が、携えていた折畳椅子を貸す。良かったなァとその夫君。

この人たちは塩釜市であの大津波に遭遇したと。とにかく逃げろと車で高台へ避難し、戻ったら、と怖気立つ話をもれ聞き慄えた。

漸く買えた菓子パンを口に押し込んで次は給水車待ちの行列、二時にくるといので正午過ぎに行き三番目だから大丈夫。ところが四時過ぎても現れず、不平の罵詈雑言。

大津波の話で心弱っている戦中派加齢者には疎ましいやら吐気を催したのは老いたる世代の脆弱さかしれぬ。

